

阿波野青畝著『掌俳話』Vol.18

52.

俳句は十七字と季題の二つの約束がある。

十七でなければならぬのに俳句と川柳とがある。

季題はただ俳句のみである。

何ゆえに季題を約束とするのか。

俳句の歴史を見れば、俳句とは連歌から俳諧連歌が生まれその第一句目を発句と呼んだ。発句は以下の付句（第二句目を脇句の七七とする。）との立場を異にする。それは挨拶を行う役目がある。その時候への平たく言うと “お暑うございます” の如き挨拶を大らかに叙べる。

その挨拶の目的は自然を賛美しそして人生の幸福を心に祈る仕組みであって、季題が生じた訳である。

明治になって発句を俳句と改められ、もっぱら俳句の一本立になった。付句する俳諧連歌、略して連句と言うがそれはあまり振るわない。

付句の一部から川柳が生まれ、現在も多く作者を出しているが、季題の約束がない。人事の機微や風刺を唱える世界を創るようになったのである。

53.

きのうはマリア様の被昇天であり、また日本降伏の敗戦記念日であった。悲喜両極のまじわりあった感情で迎えた。

今日は送り盆の日、京都に大文字がともり各地で灯籠流しをするであろう。

最近になって行事が観光的に見られるばかりで、主要な目的がなんであるのかとまどいさせられてしまうものが多い。

雲海は泰し八月十五日 青畝

霧ヶ峰で雲海を見た。八ヶ岳の鋭い矛はわずかにのぞき、さらに富士の霊峰が盃を伏せた正しい形を薄く現していた。

この印象がふと八月十五日に浮かび出たので句にした。過去現在未来の三世を通じての真の平和な念願を一生懸命に捧げるものである。

54.

贈られた月下美人というサボテン属の花が豪華に咲きました。芳しい匂いが部屋に充ちました。が夜の三、四時間たてば忽ちに萎えしぼみました。もののあわれです。

すべて草木の花はそれぞれの特徴をもった美しさがあります。その美しさもしぼんだり散ったりしてしまえば消えます。私たちはその儚さを惜しみ、いまさら美しかったことを心に深くとどめるものです。

もし造花のごとくいつまでも散らぬ花があればこのように花の美しさに憧れるでしょうか。

人は飽きっぽいせいか、見慣れて注意しないであります。

で、儚いことに愛着がつのり、そうして一期一会として僅かな時間を十分にしなければならぬという大切なことを教えてください。